

# SAHARA

ALISSA DES COTES

066>>>067

Le premier thé est amer comme la vie  
Le deuxième est fort comme l'amour  
Le troisième est suave comme la mort.



TABI  
GAKU  
05

## THE MOMENT OF TRUTH

The scenery of the earth made four photographers release the shutters.

I FEEL  
THE EARTH  
MOVE.  
04

MOMENTS  
FROM  
4  
PHOTO-  
GRAPHERS

I WONDERED HOW IT WILL BE LIKE  
TO TRAVEL TO KANO IN COMING TWO MONTHS.  
AS I WAS GAZING UPON THE STARRY HEAVENS,  
WAITING STARS TO GIVE ME AN ANSWER,  
I DROPTED OFF TO DEEP SLEEP.

## トゥアレグ 青い民族、自由な人々

写真◎文 デコート・豊崎アリサ

photographs and text by Alissa Descotes-Toyosaki

砂漠を進み始めた直後、私の夢は思いのほかすぐに叶えられた。ラクダ63頭、男6人のトゥアレグ族のキャラバンと遭遇したのである。そしてさらに一週間後、砂嵐の中をラクダに乗って一人歩いていると、400頭のキャラバンにぶつかった。巨大キャラバンの突然の出現に私はびくくりした。相手の方も、砂漠の真ん中に突然現れた異国の女の姿に仰天していた。お互いの目は点になった。そこから40日間彼らに同行し、トゥアレグの姿をカメラに収めることができた私は、意気揚々としていた。でも同時に、キャラバンの現実の姿に胸の奥

◆出逢い◆  
砂漠化防止計画の通訳の仕事でアフリカを訪れたことをきっかけに、まるで海賊のようにサハラを航行する砂漠の民に強い憧れを持つようになった。そしていつしか、キャラバンの旅を夢見るようになっていった。時が経つにつれ、その思いはどんどん膨らんでいくばかり。とはいえキャラバンに知り合いもなければ、どこで会えるのかも分からない。そこで思いついた。こうなったら自分のキャラバンを作ってしまったら、と。ラクダ3頭を買い付け、ガイド1名、ラクダ使い1名を雇うことにした。

98年12月、北ニジェール。ちょうど塩キ



が痛んだ。大昔の商売キャラバンの豪華さと豊かさにはもはや消え失せていた。キャラバンの現実とは、塩の積み下ろしをする生体力であり、過労に命を落とすラクダであり、ぼろ服を着て冷たい風に逆らう男達の姿であった。雄大な冒険の英雄を想像していた私はショックを受けたが、彼らの姿がなぜか盛装を失った日本の武士と重なって、懐かしいような感覚を覚えた。

トゥアレグ族。マリ、ニジェール、アルジェリア、リビア、ブルキナ・ファソという、植民地時代に分けられた5カ国にまたがるサハラ地域の遊牧民である。彼らは複雑な社会規範に従うカーストに分かれているが、ベルベル語の一種であるタマシエック語とチフィナー文字によって強く結びついている。「武士道」の誇りを持って死を恐れない彼らは、何度でもサハラ砂漠に侵入しようとしたフランス軍にも尊敬と畏怖の念を抱かせた。Blue Menと呼ばれるトゥアレグは、名誉を重んじる男性だけに与えられる刀と共に、思春期になるとヴェールを授けられる。肌に見えるインディゴ・ブルーのヴェールは、日差しや砂を避けるためだけでなく、感情を隠したり、巻き方によって態度を表す意思表示の手段として使われたりもする。トゥアレグ族では女性達もまた、社会的に大変重要な役割を果たしている。日本の天照大神のように、民族の祖先は女性であったとされ、イスラム教でありながらトゥアレグ女性にはヴェールをかぶらず、際立つた自由を持っているのだ。抑圧、反乱、干ばつなどの苦境を強いられながらも、その高い順応性でいくつもの苦難を乗り越え、トゥアレグは今でも、尊厳と遊牧民としてのアイデンティティを保ちながら、観光ガイドや工芸品の販売といった新しい手法を探り入れ、自由に生き続けようとしているのである。

こうして、最初の旅から数年の間に、トゥアレグについて色々なことを知るようになった。トゥアレグは、マスコミが流すロマンチックなイメージとは少し違っているということ。そして塩キャラバンは、美しい夢のように砂漠を横断する時代遅れのラクダの群ではなく、多民族を取り込んだ自立しているという事実。知れば知るほど、私はトゥアレグに惹かれていった。そして何より、以前自分が完全に入れなかった現実、今度はDVカメラで立ち向かいたいと思ひ、もう一度キャラバンの旅に出ることにした。

S



たボロボロのケールを使って、バッテリーの電源ライトが奇跡的についた。

テントの陰で、キャンプに残った女達にお茶をもらい、健康的で美しいタマルアンという女性の膝に頭をもたせかけ、髪をやさしく編んでもらった。沈みかけた陽の光にラクダのこぶが横切った。さてと、出発はまもなくだ。

プハメッドの車でキャラバン商人達の集合場所に着く。そこで男達の長い挨拶が始まる。一人一人に手を差し出して、お互い手のひらを何回も滑らせながら挨拶の決まり文句を繰り返している。

今回は、プハメッドに紹介されたリサーというキャラバン商人と同行することになった。リサーのキャンプで荷物を下ろし、リサーの息子である16才のプシャの作ってくれたお茶を2杯飲むと、友人プハメッドは車で野生地へと消えていった。

翌朝早く、リサーの「イチヒッヒー」という叫び声と共に私達は出発した。リサーのキャラバンは、ラクダ155頭、男10人、子供14人、羊1匹だ。

3日間、太陽のリズムに合わせて歩いた。まだ9月の終わり。前回真冬に旅した私は、あまりの暑さにあきれ果てた。ここでこんなに暑かったら、砂漠に入ったらどうなるの……。しかも今回は、鞍のある自分のラクダではなく、リサーが先頭するラクダに乘らなければならない。おまけに、キャラバンの人たちと同じように、積み荷の間に敷いた毛布に座らなければならないのだ。その乗り方にはかなりの運動神経を要した。キャラバンは発進したらキャンプまでノンストップだから、歩いたままのラクダに乗ることになる。まず、1頭1頭をつなぐ縄を掴んで、自分のラクダの首を下げ、ラクダが反抗する前に、小さくジャンプしてすばやく左膝を首に乗せ、微妙なバランスを保ってコブまでよし登る。最初のトライは成功したが、その後、はずみをつけすぎて、何回も首の向こう側に落ちて、大笑いを浴びた。

ちが食後に私達のキャンプに来て、プシャと3人で焚火の周りに座って縄を編みながら、元気に遅くまでおしゃべりした。あまり言葉が通じなくても、子供達と心が通い始めている。

テネレ砂漠に入ってから3日目。明け方4時、ミレット穀物を砕くすりこぎの低い音に起こされる。お茶を飲んで、夕べの余りを食ってから、すぐ出発の準備が始まる。月明かりの下、男達が大声を上げながらラクダの背に木切れや干し草、水などの重い荷物を載せる。ラクダのうなり声は砂漠の沈黙を突然破り、恐ろしかった。先頭が東に向かって歩き出した頃、月が沈むと同時に日が昇っていた。東西の色づいた地平線の間にゆっくりと進み続けるキャラバンの姿を遠くから見つめていると、あまりの美しさに泣き出しそうになった。走って走って、くたくたになりながら、やっとキャラバンの尻尾に追いついた。バルダは相変らず静かに歩き、私に水のボールをくれた。先頭から4番目のアウラックという自分のラクダに乗り、こぶの上に気持ちよく休んだ。11時、エリアスの叫びがランチ休憩を告げた。男達が次々と地面に降りる。各キャラバン隊の一番後ろのラクダに乗っている子供達は、今朝方酔いたミレットとタツツ（ナツメの実をボールに入れた後、先頭のラクダの横にぶら下がっているゲルバの水をボールに注ぐ。こうしてできたミレットのお粥を持って自分のクルーたちに配って回る。このお粥を大きな木のスプーンで食べながら歩くのだ。その短い休憩の後、男達がラクダのこぶによじ登ると、再びお昼の辛い行進が始まる。ラクダの揺れに、だんだん眠気が襲ってくる。昼頃になると、全キャラバン隊をリードするマデユグという偉大なガイド以外、皆みつともない姿になっている。日差しと渴きから逃げるために私もなんとか寝ようとしたが、ラクダの上で熟睡するのは到底無理な話。眠りにつくと頭がうなだれ宙に浮かび、どうしても目が覚めてしまう。だが50度近くの太陽の

無限に広がる牧草地。背の高い金色の草の中で、キャラバンの人々は鎌を持って一生懸命干し草の束を作っている。若者は陽気に歌いながら枯れ木の枝を下ろし、薪を貯える。キャンプにいても役に立たないし退屈していた私は数人と一緒に水場まで行くことにした。朝10時、子供5人と大人2人が70頭くらいのラクダを集めて出発した。すでに日差しは暑い。ちよつと歩いてから、皆次々とラクダに乗った。ラクダは荷物もなく自由に歩いていた。水の重荷で傷つけないためにこぶの前後に載せた、乾燥糞を詰めた革のクッションの間に乗る。こんな乗り方は初めてだ。不安定さを直し、こぶの毛を強く掴むと、裸のラクダの上に大きな自由を感じた。

私達は牧草地を越えて、激しい石の山にゆつくりと入っていった。2時間が経って、段々のどが渴いてきたが、キャンプに少し余っていた水を誰も持って来ていなかった。屋の太陽に襲われながら、目的の水場に辿り着くまで、皆文句ひとつ言わず静かに進んでいる。着いたのは2時間後、のどはからから舌がぶら下がるほどだった。

焦げた野生地に、こんな美しい水場があるなんて思いもよらなかった。白い岩の中に溜まった真青な雨水のプールは宝石のように輝いていた。4時間の渴きを癒すのは一生忘れられないほどの快楽だった。砂漠の冷蔵庫と呼ばれる「ゲルバ」というヤギの革袋に水を汲む。子供達と20個ほどのゲルバに水を入れ、岩の後ろで5日ぶりのシャワーを浴びてから、帰路についた。静かに大地に流れ込む赤い陽光と共に歩いていると、心満たされた小さなクルーたちが低く歌い始めた。伝統的な長いみつ編みを持つ美しい少年エリアスは、清らかな声で何回もトウアレク武士の叫びを上げた。私はぞくぞくした。

夕暮れにキャンプの炎が見えてきた。貴重な水を探しに行った小さなクルーたちは大歓迎され、誇り高く感じた。その夜は、エリアスとタゴという水場に同行した子た

下に何にもせずにいると気が狂いそうになる。私は地面に下り、アウラックのくれる小さな影に身を寄せながら、ここで一体何やっているんだろうと自問しながら歩いた。

5日目の昼、テネレ砂漠の真ん中に位置するテガラックの井戸に辿り着いた。前日から水がほとんどなくなり、リサーに飲む以外のお水を使っちゃだめだと言われ、やる気をなくした私は非常に不機嫌だった。

細長い崖に数本のいじけた刺の木が立っていて、深さ20mほど掘られた穴の中に水があった。誰も住んでいないこの荒れ果てたオアシスを見て、私は何もせずにただキャンプに座った。しばらくすると他の男達と一緒に水を汲みに行ったバルダが満杯にした一個のゲルバを持って帰ってきた。私は水のボールを取って飲み、そのままボールを持って頭から水をかぶった。やっと自分を取り戻し、水場まで走ると、男達がタイヤのチューブでできたもので一生懸命水を汲み、ラクダ達に飲ませていた。隣の若者は笑いながら手足を洗って、「アリス、アマン・イマン!」と言った。そう、お水は命だ。元氣になった私はキャンプに戻り、玉ねぎ、ガーリック、トマトペーストのソースを作り、プシャが用意したマカロニにかけて食べた。バルダのお茶を3杯飲んでお腹が一杯になった私は、マッドレスを持って離れた木陰へ行き、深い眠りに落ちた。目覚めると、強い砂嵐でキャンプはほとんど見えなかった。キャンプでは、毛布などで作った避難所の中で、バルダ、プシャ、リサーが砂に埋まって横になっていた。

その時、鼻に一滴の水。真つ暗になった空を見上げると、もう一滴が落ちてきた。「うそ!」瞬く間に嵐が始まった。奇跡だ。外には、雨の下で草を静かに食んでいるラクダと私の姿しかなかった。崖の方に歩いていくと、オアシスの守り神のように一本の木が遠くにはつりと立っていた。「最も欲しかったことを叶えてくれたね」と、私はその木を抱き締めた。それからまた雨の中を歩き続けた。痛みや疲れは雨に全部消

TABI  
GAKU  
05

THE MOMENT  
OF TRUTH

The scenery of the earth made four photographers release the shutters.

I FEEL  
THE EARTH  
MOVE.  
04

MOMENTS  
FROM  
4  
PHOTO-  
GRAPHERS

Moi, mon coeur me brûle.  
Sans plus tarder je pars  
Là où quelque chose  
De beau se passe.

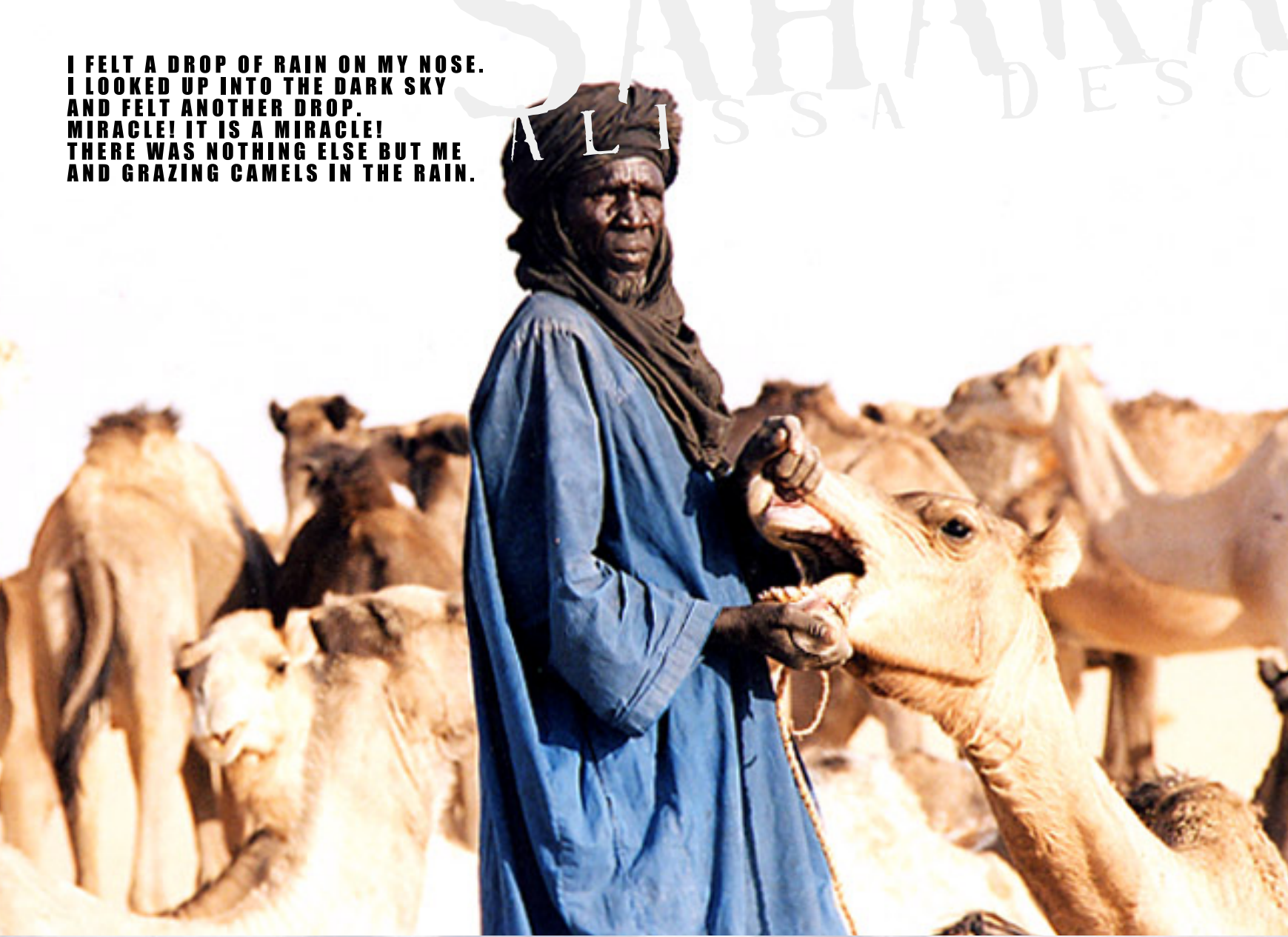
旅学-005-071 4C/C/M/Y/K

旅学-005-070 4C/C/M/Y/K



I FELT A DROP OF RAIN ON MY NOSE.  
I LOOKED UP INTO THE DARK SKY  
AND FELT ANOTHER DROP.  
MIRACLE! IT IS A MIRACLE!  
THERE WAS NOTHING ELSE BUT ME  
AND GRAZING CAMELS IN THE RAIN.

## ALISSA



えてしまった。崖に登り、雨に濡れる砂漠を見下ろす。すっかり勇気づいた心は、感謝の気持ちでとても暖かくなって、雨と一緒に泣いた。崖を降りる頃には、辺りを陰気に包み込んでいた雷雨がオアシスを解き放ち、真っ赤に染まった西の地平線へと去っていった。

### ◆ビルマ・オアシス◆

ナツメの木が生えた大きな崖に向けて、キャラバンは下がつてゆく。辺りには涼しげな緑の草地が広がり、遠くにはラクダの群の隙間に動く強烈な色が見える。

こうして6日間、各キャラバンのグループはビルマに住むカヌリ族の女性達と大量のダッツを交換し、塩を買った。キャラバンが泊まっている場所の隣に、岩塩を製造するカラ・サリンがあった。酷くきざぎざした丘の中で、真っ赤な塩田がいくつもあり、4月から6月にかけて、キャラバンが着く前にカヌリ族による塩作りが行われる。ビルマの岩塩は水の蒸発で出来上がるもので、ニジエールの一番暑い時期に行われる大変辛い仕事だという。

この塩を持ってキャラバンはまた歩き出した。再びアイル山脈へ向けて、大砂漠を横断するのだ。出発の時間は、ビルマで買った重い塩をラクダに載せるのに、男達の叫びとラクダが嫌がってほえる声で大騒ぎである。各ラクダは6本で計20キロほどもある塩を運搬するので、文句を言うのも仕方ない。出発時間は相変らず明け方4時。止まる時間はマデュグの気分によるが、夜の9時くらいだ。お昼の粥の後、なんとか時間をやり過ごそうと1時間歩いて、2時間ラクダに乗り、ウォークマンを聞いた

り、寝ている人を撮影したりしながら暑さの限界まで待ち、また降りて散歩をした。まぶしい光の中、遠くに見えるキャラバンは、砂丘の上にすらすらと蛇行し、砂波に溺れては、また姿を現す大きな海蛇のように見えた。私は毎日のように散歩に出かけ、帰りにキャラバンの最後尾に集まった子供達の横を通り過ぎる。彼らは砂丘を登ったり下がったり、追いかけてこしたり、レスリングしたりして大暴れしていた。彼らのエネルギーのおかげで、私はいつも活

力を取り戻した。穏やかな砂漠の青い夕暮れの中、真青なトウアレグの子達の澄み切った笑いが、千年を終ったキャラバンの精神として堂々と輝いていた。

30年以上もこの時期に降ったことのなかった雨は、キャラバンの男達を少し困惑させたが、一方で量り知れないプレゼントをくれた。往路には真っ白だった砂丘のあちこちに、美しい緑のカーベツが現れた。ほんの短い間に植えた薄い草は、遠くからはちゃんと見えたが、近づくと太陽の反射で消えてしまひ、まるで蜃気楼のようだった。夕暮れ時、男達はラクダから降りて折りを捧げ、夜になる前に注意深く積み荷を点検して、再びラクダの背の塩の座によじ登る。星の輝く広々とした空の下で、長い夜の行進が始まるのだ。疲れきった男達は士気を奮い起こすため、武士の雄叫びを上げる。それに応えて長いキャラバンの列の前から後ろまで、叫びが繰り返される。誇り高きトウアレグの叫びを聞いて、砂漠の真ん中でふと、日本の侍のことを思った。

### ◆2ヶ月ぶりのテフララウト◆

テフララウトのキャンプに着いたのは夕暮れ時だった。暗くなつてからキャンプに入るのは不誠実だといつて、キャラバンはキャンプからちよつと離れた所に止まった。荷物を下ろしていると、キャンプから走ってきた男の子が感情を隠しながら重々しい様子で私達に挨拶した。彼の小さな手はとても暖かった。次に子供達の群が近づき、ためらって止まり、丸い目でリサーを見つめた。忙しく荷物を下ろしていたリサーが、やっと子供達を呼ぶと、一気にわ

めきながら走ってリサーの腕にくっついた。鞆からダッツが出されると、まるでクリスマスの夜のような雰囲気になった。インディゴ・ブルーの闇の中、炎が輝くキャンプから女達が次々ともてなしに来た。一人の女性の影が私に近づき、疲れているかと聞きながら、本当に大丈夫かどうかを確かめるように私の肩と腕をやさしく触った。その声はあまり穏やかで暖かく、胸が一杯になった。皆、テントの前に敷いた大きなゴザの上に横になり、同じ挨拶の言葉を永遠に繰り返しては、私の横には、初日にもてなしてくれたタマルアンがいる。

ヤギ乳のミレット粥、乾燥チーズ、一杯目のお茶。料理が断続的に出てくる。パオバブのソースをかけたミレット粥、2杯目のお茶。私は少しうとうとしては、料理が出てくれば起きて、また眠り、を繰り返していた。マカロニ、乾燥チーズ、3杯目のお茶。3回目に目覚めると、周辺に住む家族や友達は皆帰っていた。外に用意されたベッドに横になり、ヤギの鳴き声を聞いた。一週間後、キャラバンは雌ラクダと子ラクダの群を連れて、北ナイジェリアに位置するカノの町に向けて再び出発する。ラクダを放牧したり、緑サハルの様々な市場でダッツと塩とミレットを物々交換したりしながら、また様々な民族と出会うだろう。カノへ向かうこれからの2ヶ月はどうなるのだろう、と星空に答えを探しているうちに、いつのまにか私は深い眠りに落ちていった。

profile  
デコート・豊崎アリサ  
Alissa Descotes-Toyosaki  
1970年、パリ生まれ。父はフランス人、母は日本人。幼い時から父とともに世界中を旅している。94年、日本語の修士取得後、東京へ。98年より塩キャラバンとの旅を始める。01年にパリに戻ってから西アフリカでの砂漠化防止計画の通訳や雑誌への執筆活動が続け、03年9月、撮影のため4ヶ月間サハラへ。現在は塩キャラバンの人々の生き方についての52分ドキュメンタリー映画を編集。alissasama@hotmail.com

TABIGAKU05

THE MOMENT OF TRUTH

The scenery of the earth made four photographers release the shutters.

I FEEL THE EARTH MOVE. 04

MOMENTS FROM 4 PHOTOGRAPHERS

